



1944年、延安日本労農学校の学生たち。後列右から二人目が前田さん。当時は「杉本一夫」と名乗っていた

【戦後60年記念特集】戦争の世紀を越えてⅡ

ファシズム下、 名もなき抵抗者たち

日本軍に反戦を 呼びかけた日本人

前田光繁さん
山下好之さん

「兄弟たち、君たちの本当の敵はここにはいない」——かつて中国に侵略していった日本軍の兵士たちは、最前線の戦場で、反戦を呼びかける声を聴いた。日本人反戦同盟の命をかけたたたかいを当事者の口から聞く。

八路軍の捕虜になる

——お二人が中国に渡った経過はどのようなものだったのですか。

前田 当時の僕は軍国少年でした。丁稚奉公しながら夜学に勤めていたんですが、飛行機乗りになりたくて、海軍に志願したんです。ところが軍艦のなかの生活は厳しくて、胸を病んでしまいました。軍隊が怖がるのは性病と肺病です。それで海軍をクビになりました。家に帰っても恥ずかしいですからね、「満州国」に飛んでいったんですよ。ちょうど日中戦争が起きる直前、1937年6月に僕は満鉄（南満州鉄道）に入っただけです。山下 1944年5月に、僕は日本で工

業学校を卒業して、神戸の貿易会社に応募し就職しました。しかし入社一カ月ほどしてすぐ、会社の船もろとも軍隊に徴用されてしまい、上海の第二海軍軍需部に配属されました。

——前田さんは日中戦争の開始直後に中国共産党の軍隊である八路軍の捕虜となつたわけですね。

前田 日本軍が華北を占領し、華北鉄道ができたものだから、満鉄の人間もたくさん華北に派遣されました。しかし、僕はまだ未熟だったから「残れ」と言われたんです。しかし、我慢できないで、満鉄を辞めて、満鉄の子会社に当たる土建会社に移りました。

河北省の石家荘という町の近くで作業していた時のことです。朝鮮人の現場

監督が、近くに「匪賊」が出ていって聞いて逃げたことになった。そこで僕が急ぎよ現場に行くことになった。石家荘の南にある双廟という駅の近くにあった事務所

所で寝泊りしながら、現場を見たり、労働者の食料を按配したりしました。

その時、近くに「朱毛匪」が出たという連絡がありました。朱徳と毛沢東の軍隊、つまり共産党の軍隊です。その時は八路軍とは言っていなかった。日本軍に報告し、自分も戦闘に参加するつもりだったのですが、民間人はだめだと言われて、事務所に戻った。そこで眠っていたら、夜中に数名の八路軍の兵士がやってきて、僕に躍りかかってきました。必死に抵抗しましたが、がんじがらめに縛られてしまった。

捕まって表に出たら、隊長がやってきて、お前は誰だと聞いてくる。満鉄だと言ったら、「この野郎！」と拳銃を口のなかに入れたんだ。これでおしまいだと思つたよ。しかし、隊長は引き金をひかなかつた。しばらくして拳銃を抜くと、ボカーンと頬つぺたを一つ張られた。1938年7月29日の夜です。

——山下さんが捕虜になつた当時の状況はどのようなものですか。

山下 海軍に徴用されてから、船で武器や弾薬を運ぶ仕事をしました。山東省に武器と弾薬を運び、帰りに鉱物や大豆、綿花とかを持つてくるのです。

44年9月、青島に武器と弾薬を運ぶことになって、上海を出港しました。ところがその時は台風がひどくて、青島

を通り越し、小さな湾に押し流されてしまいました。出ることも進むこともできなくなり、船に水も入ってきたので、船から降りたんです。海陽県という場所です。そこで私たちは八路軍に捕まりまし

た。捕虜になったときには自決しなければいけないと教えられているでしょう。軍人じゃなくても、そのように教え込まれていたわけです。しかし、敵を捕まえたにもかかわらず、相手の態度が非常に丁寧なんです。これは「匪賊」じゃないんじゃないかと思ひましたね。当時の自分は、八路軍だとか共産党だなんて聞いたこともありませんでした。

——当時のお二人は戦争に対してどのような考えをもちましたか？

山下 その時は日本が負けるとは思っていませんでした。必ず勝つと信じていました。八路軍に捕まっても、いずれ日本軍が迎えに来てくれると思つていました。この戦争が中国に対する侵略戦争だとか、間違つた戦争だとか、そういうことは考えたこともなかったですね。前田 八路軍に捕まっていたらいろいろと勉強するまでは、ぜんぜん考えませんよ。「満州は日本の生命線」で、日本は狭い国で資源がないから「満州」がなければ成り立っていないと教えられていた。それに、蒋介石の圧制に苦しんでいる中国人を助けるために戦争しなければいけないという教育をともに受け取っていた。その他に進歩的な情報は何も入ってきませんでしたからねえ。

「三大規律・八項注意」

——八路軍での生活を通じて、そうした考え方が変化していったのでしょうか。

前田 八路軍に捕まつた時は殺されるものだと思つていました。しかし、八路軍の軍律である「三大規律八項注意」を見せられて、そこに「捕虜を虐待しない」とあるのを見せられる。だから絶対に殺さない。しかし全嫉僕は信じない。

僕には兵士よりもいいものを食べさせるんです。「君たちは米を食べているから、僕たちのようなものを食べられないだろう」と。しかし僕は、上等のものを食べさせて、日本軍の情報を引き出したら殺すんだらうと思つていました。

しばらくしてもっと山奥の拠点に連れていかれました。何日間か歩きました。その時の同行者は兵隊一人です。逃げようと思えば逃げられる。しかし方角がわからない。それに、一緒に八路軍の兵士が素朴そのもので、鉄砲を逆さに担いだりして、ぜんぜん敵意も警戒心も示さない。馬車がある時は、自分は歩いて、僕を馬車に乗せてくれる。宿では自分が粟飯を食べて、僕にはもっと上等な食事を出してくれる。だから、逃げられるんだけど、もし僕が逃げたら、彼は責任を問われてしまう。それはかわいそうだなと思つて、逃げられなかった。

行ったところが129師団の政治部なんだ。劉伯承が師団長で、鄧小平が政治委員をやっていた。張宝山という人が

敵軍工作部の部長をやっていたんだけど、最初に彼の家に言つたとき、彼が流暢な日本語で「いらつしやい」と言つたんですよ。びっくりしましたねえ（笑）。彼の部屋に10日ぐらい一緒に住んだんです。彼も「なぜ殺さないか」ということを説明する。しかし僕は、「殺さない」というのなら、僕は自決しなければいけない」と言つたんです。しかし彼は「せつかく八路軍に来たんだから、敵側に来るなんて滅多にない機会じゃないか、よく見ていきなさい」と言う。なるほど、それもそうだと（笑）。死ぬならいつでも死ぬんだから。

2週間後に僕は移動しました。というの、ノミがすこいんですよ。「張さん、八路軍が僕を殺さないのはわかっただけど、このままでは僕はノミに殺される」って（笑）。それで僕は前線の最後方である野戦政治部に送られたんです。八路軍総司令の朱徳さんや副司令の彭徳懐さんがいた場所です。僕らは朱徳さんとバスケットボールをやりましたよ。

敵軍工作部の人たちは、みな日本留学の体験者で、流暢な日本語を使えるし、日本の進歩的な本も持っている。河上肇や小林多喜二の本もあった。日本では見たこともありませんでした。こちらの持つ疑問にも彼らは丁寧に答えてくれる。それで少しずつわかってきたんです。

その時、決定的な出来事が起きました。ある日、前線に行つてみないかという話を持ち込まれてきたんです。日本軍の捕虜を殺さないように、中国の民衆や兵士